

桑原武夫

雲の中を歩ん
ではない

文藝春秋新社

雨云の中を歩んではならない

又原武夫

雲の中を歩んではならない

略省印驗

認承者著

昭和三十年四月十日 初版
昭和三十年五月二十日 再版

定價 二〇〇圓
地方賣價 二一〇圓

著者 桑原武夫

發行者 車谷弘

印刷者 北川武之輔

發行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西五ノ五
振替口座東京七八七四三番

萬一落丁飢丁の際は、お買求の書店
又は發行所にてお取換致します

印刷 細川活版所
製本 牛込加藤

Printed in Japan.

目

次

日本知性への注文……………	7
平和についての架空座談会……………	21
平和運動と誓い……………	34
雲の中を歩んではならない……………	50
吉田首相と新聞……………	55
学問を支えるもの……………	64
国際セミナーに参加して……………	68
日本学術会議のために……………	74
*……………	
考史遊記……………	86
北海道断想……………	101
しろうと農村見学……………	117
*……………	
日本映画雑談……………	165

七人の侍……………171

『近松物語』の感動……………179

*

水害雑感……………186

四角いたまご……………190

角帽金ボタン……………194

書物ぎらいの読書人……………198

アマクチの流行……………202

鴨東線は早くつくるがよい……………207

敗戦前後……………214

旧友の文章……………222

自己解説……………229

*

あとがき……………239

題 字
佐 野 繁 次 郎

カ メ ラ
田 村 茂

（文中の写真は著者撮影）

雲の中を歩んではならない

日本知性への注文

——現実的思考の必要——

国がやぶれたということとは、それ自体としては悲しいことにちがいない。しかし、一九四五年の八月、国民の多くは涙をながしながら、同時にホッとした感じを禁じえなかったのだ。そして「進歩的」なアメリカの推進によって、やがて民主的な文化国家が実現するような希望ないし夢がもたれた。それが錯覚だったことはやがてわかる。そのおり吐かれた「自由が配給された」という言葉は、客観的観察としては正しかったが、自由を自分たちの努力によってかちとりえなかったことへの恥らいをこめてでなく、ただ自由を大衆に与えるのは考えものだ、といった含みで発言されたので、責任のある警世語とはなりえなかった。長らく自由な発言権をうばわれていた日本のインテリは、事情の急激な好転のうちに、一般にややトボケていて正しい現実的思考ができなかったというのが、悲しむべき事実である。共産党の人たちが、マツカ

「サー司令部へ行って、この「解放軍」の元帥に万才を叫んだのが、その一例だ。自由主義者もトボケていた。三木清の解放運動——それはあのときの状況では、決して危険性のないことであつたのに——をおこたり、これを獄死せしめたのである。三木の著作集を出版するという知的な行動はやがてなされたが、救出という現実行動への発想がなかったことは恥ずかしいことだ。（私自身は当時仙台にいて、三木が入獄していることさえ知らぬ、というトボケさ加減であつたから、救出運動の存在を知らなかったのかもしれない。）このように、日本インテリはかなりトボケていたのだが、しかも敗戦後一二年ほど、衣食住のとぼしさにもかかわらず、彼ら（あるいは私たち）が、生き生きとした顔つきをし、生き生きとした文章を書いていたことはなかった。このことの自己反省なしには、これからちゃんとしたことはできない。『日本資本主義講座』（第一巻）のアメリカの対日文化政策の筆者たちのように、相手の悪さ（それはたしかにあるが）だけを示して、その悪さの見ぬけなかった自分たちの未熟さにホオカムリするのは、学的でもなければ、説得的でもない。

やがてアメリカの政策が保守的に転換すると、進歩にせよ保守にせよ、アメリカは当初から常に日本のためではなく万事自国に有利なようにやっていたのだ、という至極当然な、初めからわかつておるべきことが、その時にいたって実感された。そこで戦後それまでとなえてきたことを続けようとすれば、程度の差はあるが、何ほどか反米ないし反政府的とならざるをえ

なくなった。このときに「政治にはタッチしない」というインテリを生じた。それはいさか学究風に見えるが、実はつまらぬ発言なのだ。反政府的なことは言わぬ、というだけのことなのだから。敗戦当時から民主主義化もやはり政治にかかわるから、アメリカには協力いたしかねる、とでもいった方が筋が通ってよかったのだ。いま一つの態度は「現実主義」。サンフランシスコ条約のころまで、ながらくインテリの語彙から姿をけしていたこの言葉は、本来観念的ないし公式的にでなく、現実在即して考えるという意味をもつが、現代日本語においては「なりゆきまかせ」あるいは「長いものには巻かれろ」という含みを必ずもっている。現実の中における思想放棄を結果することは、さきの「政治にはふれぬ」というのと変りはないのである。そこで、残りの、あくまで思想しようとするインテリの責任はいよいよ大きく、しかもその立場は困難なものとならざるをえない。そして今日ほどインテリの顔つきや文章が苦渋にみちていることはないのである。

しかし、国民の負担において高等の学問をおさめることのできた人間が、中間階級としてのインテリの弱さ、といった言葉を援用して自己の無力感を正当化することは、責任の回避である。また日本のインテリが従来無力だった原因の一つは、大衆との結びつきがなかったことにある、と気づいたのは一進歩だが、現状においてはインテリと農民の結びつきというようなことは決して容易ではない。その困難の自覚ないし実証から、ひるがえって自己卑下におち入る

ことも、また責任回避の一種である。インテリは強くなるように努力する義務がある。もちろんインテリの努力のみによつて日本がよくなる訳ではなく、また大衆との協力を目ざさねばならぬこともいうまでもないが、私がやや具体的に知っているのはインテリのみであり、またこの雑誌〔中央公論〕はインテリ雑誌だから、問題を限って話すことも許されるだろう。

インテリが弱さから脱却するためには、まず、それぞれ現実の場において自分で考えうる能力をもたなければならない。こう書いてくると、わかりきったことだ、という笑い声がきこえるような気がする。わかりきったことが一向できていない所以を、これから実例に即してのべたいところなのだ。一わたり聞いて下さい。

自分自身でものを考える、というと、それは日本を西欧化しようとすることで、とうてい不可能であり、また、個人主義の時代はすぎつつある、などとすぐ批判したがる人があるだろう。水爆の時代に十九世紀風の個人主義で事がかたづくとは誰も思っていないまい。しかし、個人主義と個人の責任とはちがうのである。あくまで自己の責任で問題を考え、しかも、それに固執するのではなく、やはり自分で考えた他の個人と話し合い、そして協力するということは、いっしょに必要なことであり、それがインテリの任務であらう。社会の発展段階説を信じるのはよいが、それにしばられて、現実的な発想ができず、手をこまぬいて時勢を慨嘆しているインテリが多すぎるのが、日本の弱みの一つではないか。

多くのインテリは、学校でマルクス主義を覚える。ところが大学などで教えるマルクス主義は、もっぱら一般理論ないし歴史解釈であって、今の日本で各人がそれぞれの出来事にどう対処すべきかという訓練はしない(学校ではそこまでしないのが当然だともいえる)。そこでそういう概論だけを講義で、またはジャーナリズムで覚えて卒業した人々のうち、実践(運動も執筆もこめて)に入ってみがきをかける少数者をのけると、あとはこの実践のための哲学を知ったがために、かえって非実践的になる傾向を生じやすい。というのは、社会にはいろいろの悪があるが、それは社会革命がなければ完全に消えはしない、という知見あるいはむしろ気分と、一方、現実における革命への見とおしの困難さから、一種の絶望感をいだくに至るからである。本当のマルクス主義者は、そんな絶望感をいだくような者はマルクス主義者ではない、そういう連中の存在は自分たちには何の責任もない、というだろう。そのとおりだ。しかし、革命がなければ何も一切片付かぬということだけを信じて、現実の手をこまぬいている気分的左派とでもいふべきインテリが少なくないように見受けられる。そうなれば一種の絶対主義で、かつて二ことめには極限概念をもち出してあらゆることを不可能化した形而上学者と同じことになる。人身売買の悲惨さをいわれて、社会主義社会にならぬかぎり根絶できません、などというのは全く形而上学的解答にすぎない。革命がすむまで、少女たちが貞操を売らされるのを見すごしてよいという非人道的なアキラメ思想にそれはつらなる。日本におけるマルクス主義の通

俗的普及が、こういう思いもかけぬアキラメ的気分をかもし出していることは、やはり注目すべき社会現象だ。

私はマルクス主義をひやかしているのではない。ただ一般に、日本ではすべて理論は自国製ではなく、外国輸入だから、もともと日本および日本人に適用しにくい面をもつが、その上、従来理論は理論として、または学説史的に学びとられたので、理論は現実を切りひらく（他人に切りひらいてもらうのではなく、自分で切りひらく）道具だという考え方が、ひどく乏しかった。その弱点は、実践ということの主眼とするマルクス主義にすらあらわれているところを言いたいのである。資本主義社会はやがて社会主義社会に移行する、という教条を復誦しているだけでは、思想していることではもちろんない。容易にそうは移行せぬ資本主義社会の現実の中で、しかも自分の理論はあくまで堅持して、それを現われ出る個々の問題に自ら適用するのでなければ現実的思考とはいえぬのだが、それがどうやら乏しすぎるのである。一例をあげれば、「国民文学」がとなえられたこと自体は極めて正しい発想だが、そのさい、質の問題だけを考えるが、量の問題に気がつかぬのは、理念論ではあっても現実的思考ではない。（吉川英治、さらに古くは徳富蘆花、山本有三などのことを無視した「国民文学」論なのだ。）また、国民文学の要請は、日本近代文化における西洋への傾斜の甚だしき——たとえば、いま私の机の上を見ると、筆記帳にはすべて英語で《Note Book》と印刷されており、エンピツにも消

ゴムにも日本語は一字もなく、外国語のみがしるされてある、そういうところに端的に象徴されるバカバカしい植民地性との連関のうちになされねばならぬ筈だが、そういう指摘をした人はないのである。そんなことが気になるのは些末主義だといわれるかもしれない。しかし、文学のいとなみは些末の無視のうちに成立するものではない。些末なものの集積が私たちの内面をつくるともいえるのである。私などは、日本人が（輸出品は別として）日本人のために作った製品で、日本語で表記しないものはすべて排斥する、といった不買同盟のような運動が成立しないような精神的風土では、真の国民文学は成立しがたいと思っている。

話が本筋を少しはなれたようだが、私が日本のマルクス派に理論的考察と同時に現実的思考を要求したのは、マルクス主義だけが日本の現実と切りむすんでいるように見えるからである。もちろん社会や文化を考える理論はほかにもある。しかし、その大部分は「学問」になっている。そして学問の理論とは、日本ではそれで何かを作り出すものではなく、ただ学的に鑑賞されるものという語感があるのだ。歴史学についていえば、戦後もっとも多くの仕事をしたのはマルクス派だといえる。もちろん、これをつまらぬという学者もある。その人々は、マクス・ウェーバー、トウインビーなどを立派だと思ひ（それは賛成だが）、一方、自分の仕事としては事実の集積（それは必要なことだが）の量を示すにとどまって、その事実と事実は常識でつなされ、上記の大歴史家のような理論はどこにもない、という場合が多いのである。一般に、戦

後さまざまの学説が紹介されたが、それが実用化され、それによって日本が明らかにされた場合はいさぎよくて乏しい。

もちろん私たちは、いつもむつかしいことばかり考えていなければならぬ訳ではなく、フアンテージを楽しみ、好奇心の満足を求めることが許される。映画にたとえれば、『蟹工船』や『真空地帯』に日本の苦悩が出ていることは事実だが、一方『ローマの休日』が見ていて楽しいことは確かであって、これを享受することはもとより自由である。ヘップバーンはたしかに美しいし、ワイラー監督の腕はしっかりしている。ただ同時に『ローマの休日』のような映画は日本では作れぬということも確実だろう。美しい女優が京都の街をラビットで疾走しても、その背景をなす名所旧蹟の背がひくく陰気で、美しい画面になりにくい。実存主義をはじめとして、戦後輸入された新思想の本は、大よそ『ローマの休日』だったのではないかと思われる。私たちは、それらの著作の着想の新奇さに、その分析の尖鋭さに、また仕事をなしとげた筆者のエネルギーに感嘆するが、それがどういう条件で生まれたか、またそれは私たちに利用できるか、というようなことは余り考慮しない。つまり、学術書をいわば文学書のように自目的に楽しんで読んだ観がある。インテリにはそうした享受も許されるだろう。しかし、若い、そして勉強家のインテリと話をしている、なかなか鋭いことをいう、と違ってしばらく聞いているうちに『岩波現代叢書』のラスキに、レヴィットに、ルカーチにあったぞ、と思ひあたるよう